研究

絵本作りを通した自己理解

― 保育者養成校の学生から実習園の子どもたちへ ―

大須賀隆子

● 自分の中の「子ども性」とつながるために

私は、二〇〇七年より都内の保育者養成校（短期大学）に勤務しております。保育者は子ども理解のために、自分の中に息づいている「子ども性」とつながる回路を活き活きと保ち続けるとともに、大人として今を生きている自分のあり方にも自覚的であることが求められると考えます。私は保育者養成校に勤務する前は区立幼稚園と小学校の相談員をしていましたが、対人援助職の一つである臨床心理士にとってもさまざまな次元における自己のあり様についての理解が前提となります。

そのようなことから、私が現在保育者養成校で担当する「総合演習」のテーマは「自己理解」です。この「総合演習」では一年間かけて「自分史」をつづることをゼミ生に課しています。

二〇〇八年の四月から五月に、「自分史」に本格的に取り組むための助走という意味で絵本作成を課しました。「六月の幼稚園実習で出会う子どもたちのために、世界でたった一つのオリジナル絵本を作りませんか」と、ゼミ生に呼びかけたところ「嫌だあ～、無理イ～、そんなの描けない！」という数人

の声が上がりました。彼女たちの昨年作成した絵本読書ノートが充実していただけに、これは意外な反応でした。しかし、絵本の作り手となることはゼロから創造する主体になることであり、学生によっては未知なる世界のドアを開ける体験になるかもしれないと思い直して、次のように話してみました。

「幼稚園児の自由な遊びのイメージの中に入っていくための実習準備として、いわば心の柔軟体操として絵本作りを提案しているんですよ……」。すると、抵抗していた学生も渋々承知したようでした。ほとんどの学生が絵本作成は初めてということなので、作家で川村学園女子大学准教授の上橋菜穂子氏がNHKの番組『課外授業ようこそ先輩（二〇〇八年一月十九日放送）』の中で小学生に提案された方法を採用しました。まず、主人公の姿を描きます。その主人公の横に、名前、身長、体重、性格、住んでいる所などを書き入れます。その次に、主人公にとって最も楽しい食事場面を描きます。上橋氏によれば、食べ物ができるまでの過程を考えることによって「ファンタジーの世界」にリアリティ（整合性）が創り出されるとのことでした。

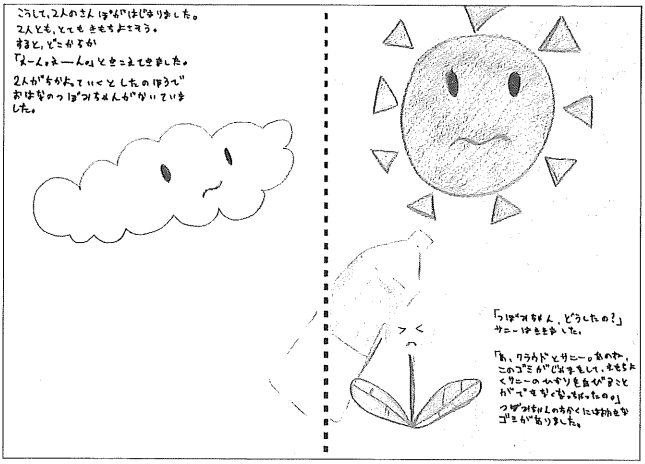
●自信につながった絵本作成

たとえば、雲と太陽を主人公とした『クラウドとサニーのおさんぽ』という題名の絵本を作ったゼミ生は、主人公らの食べ物を酸素や炭素、水素、窒素などとしています。この絵本のテーマは環境問題です。大気汚染の中で苦しむ花の「つぼみちゃん」を、「クラウド」と「サニー」が、風の「フーじいさん」の力を借りながら知恵を出し合って助けるというストーリーです。作者のゼミ生に幼稚園実習が終った七月にインタビューを行ったところ、次のように語りました。

「絵本を作るなんて最初は面倒くさいと思っていた

けれど、作っているうちに楽しくなってきました。絵も文も得意ではないと思っていたんですが、母園の子どもたち（四、五歳児）に『クラウドとサニーのおさんぽ』を読んだところ熱心に聴いてくれ、先生方からも『ぜんぶ自分で考えて作ったなんてすごい』とほめられました。今回の幼稚園実習では、子どもたちのトラブル解決の援助ができたこともあって、少し自信が出てきました。でも、まだまだ積極的に子どもたちにかかわっていくことができないので、それが私の課題です」

この学生は、幼稚園実習の後自己開拓して探した肢体不自由児施設で実習を行い、その後「自分史」の執筆に取り組み始めました。彼女の「自己理解」の鍵は絵本の主人公である「クラウド（性別は男性、年齢五歳）」と「サニー（性別は女性、年齢二歳）」の対照的な性格記述にあるように思われます。「クラウド」は「おとなしくて、しっかりしている。サニーの暴走を止められる」のに対して、「サニー」は「活発で、元気いっぱい。暴走すると止まらない（『これだ』と決めたものに対して突っ



▲絵本『クラウドとサニーのおさんぽ』

走ってしまう)」と書き込んでいます。そして、この二人の主人公を支えてくれる存在が風の「フーじいさん」です。「フーじいさん」について考えてみることによって、何か気づきがあるかもしれません。さらに、花の「つぼみちゃん」が最後には美しい大輪の花へと成長していきますが、彼女にとっての「花」の意味を考えることによって、どのような保育者になりたいのかを改めて考える契機になるのではないかと期待しています。

● 自分の思いをまとめあげる内的体験過程

さて、当初の反応どおり、何人かの学生にとっては今回の絵本作成は辛い作業だったようです。たとえば、『サンタさんの帽子』という題名の絵本を作ったゼミ生は、伝えたいテーマについては比較的早く考えついたようですが、それを伝えるためのストーリーをどのように作り上げていけばよいのか、どんな主人公がふさわしいのかということで思い悩んだようでした。そのテーマとは「一人でも多くの子どもが、素直な心を失わずに生きていけますように」という願いです。呻吟しながらも絵本を完成させたその思いを、あふれるような解放感とともに彼女は次のように語っています。

「苦しかったんですけど、自分が絵本を作ったことで、絵本には作者のねらいがあって、これを子どもに感じてもらいたいということがわかりました。それ以上に、絵本など到底作れないと思っていた自分が、何とか最後までやり遂げることができたという、達成感がありました」

彼女は、自分自身の内側で不確かな形で見え隠れしている悩みや思いをすくい上げ、展開させ、まとめ上げる過程をやり抜いたことによって、時には制御不可能に感じられることもある自分自身を自分の力で制御できるのだという自信を得たのではないか

と推察しています。この学生については、二年生になってから短大で学ぶ姿勢に変化が見られるようになったと感じていました。彼女自身がその変化を次のように語っています。

「二年生になってから、やっと自分に合った友達を見つけた感じです。個人でどんな環境にいても自分の意思を貫けばできることだったのかもしれないんですけど、私の場合、今いる友達とは静かに講義を受けることができるし、勉強する体勢もちゃんととれるようになりました。自分の考え方も変わって、それはいろいろ友達からもらったものだろうなと思うんです」

友人関係が変わって彼女が変わり始めた時期と、絵本作成に取り組む時期とが重なったことが幸いだったようです。『サンタさんの帽子』では、サンタさんの存在を信じる主人公の「めめ」（ネコ、年齢五歳）が、友達三人とサンタさんが本当にいるのかをめぐって口論をします。そんなある日、「めめ」はサンタさんの帽子を偶然見つけ、危険を冒してこれを手に入れます。すると、帽子を失くして困っていたサンタさんが「めめ」の目の前に現れ、「これでみんなにクリスマスプレゼントを渡しに行ける、ありがとう」と感謝します。クリスマスの夜、サンタさんがトナカイの鈴の音を鳴らしながら「めめ」の住む街にやって来て、「めめ」の友達も窓の外にサンタさんの姿を見たことによって、「めめ」と友達は仲直りをすることができた、というストーリーです。

小さな子どもたちの世界では、サンタさんが本当にいるかいないかは重大な関心事です。作者は、「めめ」のお母さんに「サンタさんを信じている子どものところにサンタさんは必ず来てくれるのよ」と言わせています。『サンタさんの帽子』に込めた作者のテーマは先に述べたとおりですが、主人公の

「めめ」に寄り添って読み直してみますと「私が信じていることを友達にも同じように信じてほしい」という切なる願いが込められている物語であるように思われます。この絵本の作者が二年生になって親しくなった友人たちは、彼女が信じてほしいと願っていることを理解してくれている人たちなのかもしれません。

六月に幼稚園実習を終えた彼女の振り返りのテーマは、子どもたちとの信頼関係でした。実習園の先生のご指導をいただきながら、彼女なりに心をくだいて一人ひとりの子どもとかかわったようです。ところが、どうしてもうまく関係が結べない子どもが一人いました。なぜだろうと思いながら登園した朝、その子どもが話しかけてきたといいます。その体験が鮮烈であったこともあり、「子どもたち一人ひとりとの信頼関係が日々生まれてくるのが、体でわかるというか、目に見えてきた、とても実りのある実習でした」と日誌を結んでいます。

絵本作りに取り組むことを通して、自分自身の思いをまとめあげることができたという内的体験と、現実生活の中で友人たちに支えられることによって自分自身をより一層肯定できるようになったという実感とが、実習園の子どもたちとの信頼関係をつくる過程に敏感に反応させたのではないかと推察しています。これらの体験過程を「自分史」の中でていねいに記述していくことによって、さらにじっくりと、子どもたちとかかわることのできる保育者となって現場に出ることができるのではないかと期待しています。

（淑徳短期大学　こども学科）

参考文献

蘭香代子　『童話療法―「物語」と「描画」による表現療法』　誠信書房　二〇〇八年
浜口順子　「子どもの内なる世界の理解」（『幼児理解と保育援助』より）　ミネルヴァ書房　二〇〇三年